



大学教員から見たアジ研図書館

松尾昌樹

現代中東研究者にとって、アジ研図書館は欠かせない存在だ。私はこの図書館の蔵書で育てられたのも同然であり、今も多くの研究者がアジ研図書館の資料を利用し、博士論文を執筆している。これからも多くの研究者がここで論文を書き、研究を深化させてゆくだろう。周りを見回してみれば、私の大学の同僚には、アジ研図書館を利用して教員が多数存在する。彼らの専門分野は、中国や東南アジア、アフリカなどであり、これら途上国をフィールドとする研究者にとって、アジ研図書館なしに研究を進めるといったことはや考えられないと言えよう。

私が最初にアジ研の資料を使ったのは、Archive Editions から出版されたイギリスの公文書集であったと思う。イギリスが中東地域を植民地もしくは保護国化していった経緯を調査するためにはイギリス外務省や植民地省の資料を調査する必要があるが、Archive Editions から出版されている公文書のシリーズを利用すれば、調査は格段に楽になる。アジ研図書館には、この手の資料の中でも日本の他の大学図書館には所蔵されていないものが多く所蔵されている。もちろん、部分的には他の大学図書館に所蔵されているものもあるが、それらすべてを一所で見ることができるとは、アジ研図書館だけだろう。選書作業におけるアジ研図書館の司書の皆さんの見識の高

さが窺える。

同様に、統計資料がよく整備されている点も特徴である。とりわけ、私が専門とする湾岸アラブ諸国に関しては、独立前の一九六〇年代の統計資料（残念ながら種類はそれほど多くはないのだが）をそろえているのはアジ研図書館だけではないだろうか。また、近年では各国が統計資料をウェブ上に公表するようになってきているが、これらのサイトはとりわけ途上国のサイトは頻繁にアドレスが変更され、また突然データが消されたりすることが多いため、できれば紙媒体で保存しておくことが望ましい。多くの図書館は電子データがウェブ上にアップされると紙媒体のデータを保存しなくなるが、アジ研にはまだ多くの紙媒体が継続的に収蔵されている。アジ研図書館には、このような将来を見据えた保存ポリシーを今後も貫いていただきたい。

使い勝手に関しては、さまざまな意見があるのだと思う。私が初めてアジ研図書館を利用するようになったのは、アジ研が幕張に移転して間もない頃だった。当時はまだ最上階は今のようには整備されておらず、段ボールが積み上げられていたと記憶している。ここ数年は書架が増設され、より多くの資料に触れることができるようになった。うれしい限りである。

研究者仲間からは幕張が遠いという意見もよく聞かすが、実際に足を運ぶとさほど遠

くない。むしろ、同様に統計資料がある都内のジェトロ資料室に比べると、都心部特有の混雑が存在しないため、格段に便利である（付言するならば、アジ研図書館には偉そうにふんぞり返って資料のコピーを待っている会社員や、司書をあごで使う会社役員のような人を見かけることが少ないため、個人的に非常に気分がよい）。静かですいているがゆえに、大学の学生を引き連れて見学させていただいたり、またはグループ学習室を利用して研究会を開かせてもらったりと、気兼ねなく施設を利用できるため、研究者にとっては非常に便利な環境である。

なによりも、アジ研図書館では資料が開架で保存されており、自分で資料の内容を見ながら選べるため、請求して長い時間を待つことなく運ばれてきた資料には欲しいデータがなかった、といった哀しい事態を避けられる点は大きな利点だ。

予算の圧縮など、独立行政法人を取り巻く環境は日に日に厳しいものになっている。たしかに予算の圧縮が必要な部門は存在するだろうが、アジ研図書館がなるべくその影響を受けないことを望んでいる。日本における社会科学的研究、とりわけ政治・経済・開発といった分野の研究の質の維持は、誇張ではなく、アジ研図書館の質の維持と密接にかかわっているのだから。

（まつお まさき／宇都宮大学国際学部准教授）